

## 阿波野青畝著『掌俳話』Vol.1

### 1.

若い頃に比べて日本の自然や社会が大きく変化したという感じを強くします。それはゆっくりでなく、またたく間に急速化していると思います。たとえば、若い頃の新年の空が澄んで美しかった。明けぬうちに起きて若水で洗面する時の星の瞬きが、なんと清々しかったことか。しばらくして初日の出る東へ向かって手を打つ音の嬉しかったことを思い出す。

今は公害ต่างๆで、初空というても日の光がにびい。往来は排気ガスの匂いを感じ、そろそろしい賀客の表情に生活のつかれが残っているように見えます。こうした今日であっても、私たちは心のふるさとといえる自然本来の姿をあこがれずにはおれません。

また、新年は新年らしく心持を清々しくさせる社会を求めます。

元日や神代のことも思はるる 守 武

### 2.

声俳壇に出句なさる方は必ず季語を忘れずに詠み込んでおられます。それは俳句に季語が生命になるからであります。季語のない句は俳句でないのですから採ることができません。なぜ季語が必要かということは、俳句は極端に短い詩であって多くを盛り込んで叙べられないために、余情とか連想とかに由って意味をできるだけ広くするのであります。

日本という国の特色は春夏秋冬の秩序が正しく、昔から美しい自然を賛美し、こまやかな季節感情に感動する伝統的な精神を養っております。そこで季語が制定されるのであります。季語はあらゆる季節的要素を圧縮して短い言葉となっているが、それはまた無限に広がる可能性に富んでいます。

季語をよく生かせる人は立派な季節詩をなし、生かせない人は無意味に終わってしまいます。季語の働きを手品師のように自由自在に駆使するとき、多くを語らずして人の肺腑にしみ込む作品が出来上がります。

もともと俳句は沈黙の詩なので、そういう力を利用するわけであります。

### 3.

「造化に随ひ、四時を伴とす。」芭蕉の紀行文の笈の小文に、右のことばを記している。造化というのは造物主のこと、やさしく説けば自然と解釈してよろしいかと思う。ことに私どもは、自然を最も大切に、つねに自然を愛し、自然から離れることは絶対にないのである。

大まかに分類して、春夏秋冬という順序に規則正しく変化してそれを年々くりかえしている。これを注意深い目で見れば、実に微妙な変化に興味をそられるので、四時を伴とするということが、俳句を詠む私どもにとってぴったりとする言葉と言われるわけである。

そこで季の目印となる「季語」の設定があり、季語によってそのじぶんの季節を連想して感情を叙べることができる。多くを語らないで、むしろそれ以上の広がりのある緋々とした感情を端的に季語に託するという方法をとる。

ここに私の倚っている机がある。机だけでは季語にならぬから季がない。しかし私が見るところには季のない机はない。きっと何かの季語を背負う机と見て感じる。例えば春灯の机でもあり、そばに火鉢をひかえる机なので、こういうふうにとんなばあいにおいても自然の変化に伴う季節感情がついてまわり俳句を詠む好材料として、私どもと俱にこの人生にあるというものだと思う。

私どもは自然に反するという行為は出来ないのである。あくまでも自然と一致しないではいられない。ありがたいと思っている。